

サタデー コラム

日々春めき桜の開花が待たれます。この冬は岐阜市内で2度雪が舞った程度の極端な暖冬で、気候変動が懸念されます。近年自然災害が増え、昨年も台風が猛威を振るいました。

今年国内ではミツバチ不足に大変困っています。原因の一つは昨年の台風で巣箱が被害を受けたこと。もう一つはミツバチに寄生するダニの異常発生で蜂群が崩壊したことによるものです。いずれも気候変動が影響しています。

「気候変動は大人たちが豊かさを享受するため化石燃料を浪費するせいだ」とスウェーデンの17歳の環境活動家グレタ・トゥンベリさんは、次世代を代表して世界中に訴えます。脱炭素社会を目指す地球環境問題は、

秋田屋本店社長 中村源次郎氏



なかむら・げんじろう 1951年、岐阜市生まれ。博士(医学)。県経済同友会筆頭代表幹事。岐阜南法人会長。県製菓協会長。みつばちの家庭理事長。県養蜂組合連合会長。岐阜放送番組審議会委員長。岐阜県フェンシング協会会長。県立岐阜北高校同窓会長。

次代へのパラダイムシフト

現世代と次世代間の争いという新たな課題として注目されています。この問題にとって最も必要なことは「次の世代のことを考える」といった社会道徳を定着させること、すなわち「自分を中心に社会を見る」ことから「次世代を中心に社会を捉える」といった「パラダイムシフト」を起すことだと思います。パラダイムとは、その時代の規範となる「物の見方、捉え方」で、シフトは変わることです。

このパラダイムシフトを必要とする代表的なものに、SDGs(国連が提唱する17項目の持続可能な開発目標)が挙げられます。

まず、SDGsは「誰一人取り残さない」のコンセプトの下で、世代間の公平性を重視します。地球環境保護やわが国の重い課題の財政再建は、世代を超えた長期にわたる課題です。現世代が利己的に経済的な合理性だけを追求し意思決定していけば、ツケは次世代に回ります。例えば、コストの低い化石燃料に頼り炭素社会から脱却できないければ温暖化がさらに進み、大規模な災害が次世代を襲います。また必要以上の医療や介護を望み、社会保障費の拡大を抑制できなければ財政破綻を招き、次世代に大きな損失を与えます。

まず。世代間の利益を均衡させることは大きなテーマであり、世代を超えた課題を解決するために社会をどう改めていくかが今問われています。

課題解決に向け最も重要なことは、わが国が世界に先駆けて「次の世代のことを考える」といった社会規範を浸透させていくことです。この社会規範が多くの人人に共有され、パラダイムが「自己中心、今が一番」から「次世代のために」へシフトされたとき、地球環境保護や財政再建への取り組みは軌道に乗れ始めると期待されます。今こそパラダイムシフトを起すときです。私は今年の行動目標として「パラダイムシフト」を提唱し、会社や所属団体など足元から普及活動に努める所存です。